

第51回身延町西嶋和紙の里
蔡倫書道展で蔡倫大賞

顔

小沢 愛生さん

県内の幼児や小中高生、米国の日本語補習学校生らが出品した2322点の中から最高賞に選ばれた。「まさか選ばれるとは思わなかった。電話で聞いた後も正式な通知が届くまでは信じられなかった」と振り返る。

課題は「信玄朱印」。「行書で書いたが、楷書と行書の違いがそれほど大きくない文字で、行書らしく表現するのが難しかった」と振り返る。中心がずれやすいという「玄」の文字のバランスにも注意してしたためた。

課題が発表された昨春秋、体調を崩して練習ができない時期が続いたが、「納得のいく字を提出したい」と締め切り直前は深夜まで懸命に練習。昨年の第25回大門碑林全国書道展1部大会大賞に続く



ダイナミックな字へ精進

おさわ・あおいさん 山梨英和中3年。甲府市住吉3丁目に家族4人暮らし。14歳。

榮譽を引き寄せた。

「最後に下手な字を書いて終わりたいくない」と自分が納得するまで練習に取り組む。赤池幽水さんが指導する玄遠書道会の教室に通っているが、教室の終了時間になっても書き続け、母親が迎えに来て筆を離さないことがあるほどだ。

教室には先輩や同級生を含めて「上手な人が大勢」いて、お互いに切磋琢磨している。「いい環境で練習ができている。いつかは先生たちのように、見た人が何かを感じるようなダイナミックな字を書きたい」

今の目標は、書道を始めたきっかけにもなった3歳年上の兄のように玄遠書道会師範の資格を取ること。そして、山日YBS席書き大会で最高賞に選ばれたことだ。大会は書道教室など慣れた場所ではなく、小学校を会場に開かれる。「慣れない環境で、本番用の用紙は5枚。手本を見ながら書くこともできず、自分の力が試される場所。だからこそ、もし取れたら達成感があると思う」